

▶ 関門観測法の応用——ボックス圏での売買

第15回では、利益確定のひとつの方法として関門観測法を勉強した。今回は、ひとまず利益確定法から離れ、この関門観測法を応用した売買法を紹介しよう。

柴田秋豊先生の著した『転底と転換罫線型網羅大辞典』では、保ち合い8割、動き2割と述べられている。実際の相場では、保ち合いが8割というのは極端としても、現実の相場では、保ち合いがよく現れることはまちがいない。

昨年の10月から2003年2月下旬までの日経平均株価のように、ある一定の値幅の中での動きを保ち合いと呼ぶ。このような動きをする場合、鉤足では、売り買いの法則が交錯し、保ち合いの幅が狭い場合には、なかなか利益に結びつかない場合が多い。

今回紹介するのは、保ち合い相場(ボックス圏ともいう)と判断した場合に、保ち合い圏では、安値から反発し、高値から反落するという性質を利用して、関門観測法による売買をあてはめるのである。下の「株式週報」3月28日号の1つ目の見出しおよび本文をみていただきたい。

ここで述べられているのは「ボックス圏で推移する銘柄に注目し、ボックスの下値で買い、上値で利喰う」という手法である。つまりボックスの安値が関門観測法の安値の関門にあたり、ボックスの高値が、高値の関門にあたる。このような売買手法は、相場が膠着状態に入り、保ち合いと判断された場合に有効な手段となる。

ただし、3月初旬からの日経平均のように、保ち合いを下げられることもあるため、100%これにしたがって勝てるわけではない。あくまで、下放れに対するリスクを予測した上で試みるくらいの気持ちは必要だ。

「株式週報」3月28日号の冒頭ページ

天底転換

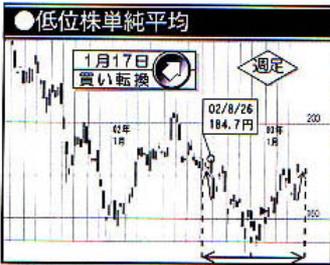
「柴田罫線」株式週報

SHIBATA CHART WEEKLY STOCK REPORT 2003.3.28

▶ ボックス圏内の売買にも要注意

2月28日号で述べたとおり、低位株単純平均の週足は左右対称形をえがき、8月26日の高値184.7円の関門を目指す展開となった(右上図)。

すでに上げた観のある銘柄が多いなか、ボックス圏で推移するフジコピアン、きよくとうといった銘柄に注目する向きがある(右中、右下図)。ボックスの下値で買い、上値で利喰う方針だ。だが最近の相場では、ボックスを上放れる銘柄は少ない。逆に日経平均の週足のように下放れるケースもあるため、注意が必要だ(2頁)。



● 低位株単純平均

1月17日 買い転換

02/8/26 184.7円

週足

▶ 選別色の強い相場

以前に週報で紹介したアルプス物流、スペースなどは、日経平均、低位株単純平均が下落した3月25日も新高値を更新した(左下図、2月21日号)。

買い上げられている銘柄もあるが、ここ2~3年は選別色が年ごとに強くなっている。「自分が目をつけた銘柄は逆行高していくのではないか」——そんな希望的観測には陥らないように注意したい。



フジコピアン (大② 7957)

23.6%上昇

週足

02/25/03号で紹介

3/14号で紹介

「柴田罫線」株式週報の冒頭ページでは、株式相場の動向を基本指標の分析を通じて、毎週紹介するとともに、その時々相場状況に応じて、読者の体験等も交えながら投資のヒントも紹介している。

赤の下線部分が、保ち合いにおける関門観測法の売買手法とそのリスクを紹介している記述部分にあたる。

赤の で囲んだ部分がボックス圏の安値を示す部分。

学ぶポイント

- ・ 株価が保ち合いで推移していると判断したら、
関門観測法を応用
保ち合いの安値で買い、高値で売る
- ・ 安値で買った場合、
保ち合いの下放れには注意

▶ 関門観測の応用—循環銘柄を探す

前ページで紹介した手法を使った銘柄探しの実際をみていこう。まず、ここ数年保ち合って、株価が一定のレンジ(幅)で動いている銘柄を丹念にさがしていく。これは、弊社の商品であれば、「柴田罫線PRO」や「ネットメンバーサービス」などで月足あるいは週足をチェックすることで可能となる。

これらの商品をお持ちでない方でも、インターネット環境があれば、週足や月足のチェックは可能だろうし、パソコンをお持ちでない方であれば、チャートブックを活用してもよい。

いくつかの候補を探し出したら安値の関門(ここが買い時のサインとなる)と高値の関門(ここが利喰いのメドとなる)を設定する。あとは、株価が設定した安値の関門にきたら買い、高値の関門付近まで上げたら売る、を繰り返していくことになる。

実際の例を一つ挙げておくと、下の関西ペイントの罫線がこれに該当する。関西ペイントの月足罫線をみると、1998年～2003年の5年あまり、株価は220円前後を安値とし、380円付近を高値とするボックス圏を形成している。このような銘柄の場合、220円付近まで下げたら上値斜線切りなどの買い法則で買い、380円付近まで上げたら下値斜線切りなどの売り法則で売る、を繰り返すことで一定の利益が得られるのである。

もちろん、前ページでも述べたように、220円付近を下放れた場合には、手を出してはいけないのももちろんである。

日経平均、TOPIXといった主要指標や、業種別平均などの指標が、上にも下にも動かずに保ち合い相場になった場合には、このような循環銘柄に注目して売買を行うといった手法も、有効と思われる。

ネットメンバーサービス「柴田秋豊の罫線」の関西ペイント月足画面



学ぶ ポイント

- ①ある一定の期間保ち合っている銘柄を探す
 - ②保ち合いの安値で買う
 - ③保ち合いの高値で売る
- ⇒保ち合いにおける関門観測法の応用